

論文審査の結果の要旨および担当者

報告番号	※	第	号
------	---	---	---

氏 名 楊 悦

論文題目 異界と地上の交響
——『うつほ物語』における俊蔭一族について——

論文審査担当者

主 査	名古屋大学教授	胡 潔
委 員	名古屋大学教授	涌井 隆
委 員	名古屋大学教授	星野 幸代
委 員	名古屋大学名誉教授	高橋 亨
委 員	名古屋外国語大学教授	福田 真人

本論文は、『うつほ物語』に登場する清原俊蔭とその子孫（以降「俊蔭一族」と記す）の繁栄を語る物語の方法を考察したものである。物語の冒頭の「俊蔭」の巻で、俊蔭の異界漂流と宝琴獲得が語られている。優れた漢学の才能を持った俊蔭が遣唐使船に乗って渡唐したが、途中暴風雨に遭って、波斯国に漂着流す。そこで仙人から宝琴と琴曲を得て日本に持ち帰る。日本に帰った俊蔭は、太子の琴師になれという帝の要望を断り、一人娘に琴を伝えて死去する。その後俊蔭子孫が秘琴をもって貴族社会の中で成功していき、最終的に俊蔭の遺言である「幸ひ極めむ」ことを実現する、という内容の物語である。従来の研究では、俊蔭一族に賦与された琴、漢学、孝などの諸要素は別別に検討されることが多く、それぞれの要素がどのように物語に取り込まれ、どのような内的関連を有するのかが必ずしも明らかにされていない。本論文は、伝奇性・現実性を横軸に、世代交代と身分上昇を縦軸に検討・分析することにより、物語の方法を明らかにしようとするものである。論文は二部構成で、第一編は、「琴」、「漢学と「孝」、「一族繁栄と累代の価値」の三章、第二編は「結婚」、「官職」の二章、計五章の前後に序章と終章が付けられている。以下に、各章の論旨を略述し、その後に審査委員会の評価を記す。

序章では、先行研究の問題点、本研究の問題意識、研究方法が述べられている。

第一章では、俊蔭一族の持つ「琴」についての考察がなされている。従来の研究では、俊蔭一族に賦与された「琴」、「書」の二要素は中国「左琴右書」に由来したものと指摘されているが、「左琴右書」の背後にある思想的文脈には十分な注意が払われてこなかった。論者は「左琴右書」に秘められた反骨精神、反俗精神の特徴を明らかにした上で、『うつほ物語』に語られる俊蔭の琴・書との相違を明晰に分析している。論者によれば、平安王朝において、「左琴右書」は文学的営為、「君臣和楽」の宮廷文化として導入されているが、その反俗的、隠逸的精神は根付かなかった。『うつほ物語』において、「左琴右書」の持つ、たとえ地上最高の権力者による高官任命であっても拒否できるというイメージは、俊蔭が太子の琴師になれという帝の要望を拒否することに転用されているが、それは一族以外の者に琴を伝授することを回避するための方法であって、「左琴右書」の精神とは異なるものである。俊蔭の琴は異国の唐で入手されたものではなく、異界で入手されたものである。この琴の異界性について、論者は、琴の獲得のプロセス、披露の条件、伝授の場所、さらに異国唐で入手した琴との比較を通じて、俊蔭一族の琴の神秘性・超越性の生成過程を詳細に分析し、明らかにしている。俊蔭は異界の仙人から秘琴を獲得し、俊蔭女・仲忠はうつほという日本の山にある「異界」で秘琴の伝授を行った。俊蔭一族の持つ異界の琴の優位性は、もう一人の登場人物である源涼の持つ、唐土由来の琴との比較によっても明らかである、と論者は結論づけている。

第二章では、俊蔭一族に賦与された漢学の才能や孝行の美德と琴の内的関連性が分析・検討されている。まず、論者によれば、漢学や「孝」は秘琴獲得の前提するための必須の手段である。遣唐使となるための条件は優れた漢才であり、それは俊蔭が外の世界へ行く前提となっている。また、両親への「孝」も方法として琴の獲得、日本帰還、琴の伝授の各局面において機能している。中国の孝子物語を踏まえた仲忠の母親孝養譚は、俊蔭女・仲忠親子の生存を保証し、秘琴の伝承を維持するために必要であり、仲忠の継母孝養譚は、貴族社会の人間関係を円滑にすることのできるこの人物の理想性を示すものである。この章において、物語における俊蔭一族の漢学や「孝」などの「異国」的な要素は、「異界」で獲得する琴の神秘性と超越性を喚起、連結、保護、維持する機能を持っているという論者の独創的な見解が示されている。

第三章は、いままで取上げられなかった俊蔭一族の「累代」の意義について考察したものである。

『うつほ物語』において、琴、漢学の才能、孝行の美德は、俊蔭一人だけではなく、その子孫にも賦与されている。まず、俊蔭一族の「累代」について、それは「清原」、「藤原」といった異なる姓氏であっても血が繋がっている子孫であれば代々秘琴、宝物を相伝できる性質のもので、父系制で言う「累代」ではなく、双系的なものであると論じた。次に、俊蔭の秘琴と学問、美德が娘の子である仲忠に継承されるという設定は、当時流行っている『白氏文集』に記された、琴や書籍などは息子がいなければ娘を経由して外孫へ伝えよう、という白居易の考え方に示唆された可能性が高いという見解を示した上で、白居易は教養として琴や本を外孫に伝えたとしても、白氏一族の系譜上では「嗣子」を立てる必要があり、俊蔭一族に見られる継承観、子孫観とは異なるということを併せて指摘した。さらに、俊蔭の「三代の孫」として、俊蔭の才能や美德を継承した仲忠が官位官職の面では撰関家の子弟の任官コースに即して昇進していることに着目し、平安時代の紀伝道儒学者による「三代」の言説との比較・検討を通じ、俊蔭一族の「累代」、「三代」は、官位官職と一体化した儒学者の累代観とも異なるもので、むしろ当時公卿たちの日記・家集など公的な場で利用される知識の継承に近いものである、と指摘した。仲忠の漢学の才能は実学的な意味を持たず、才能、美德、伝統の継承として強調されたものである。物語が四世代にまで膨大化した理由の一つは、秘琴を始めとする俊蔭一族の宝物に、世代交代・世代間の継承によって、「累代」という、当時の貴族社会で最も重んじられる価値を賦与しようとするところにある、と論者が結論づけている。

第四章では、俊蔭一族の地位上昇の方法の一つとして、俊蔭女と仲忠のそれぞれの結婚が取上げられ、検討・分析されている。俊蔭の曾祖母、母、及び妻は全員皇女である。この設定は、俊蔭一族の皇族としての出自を強く印象づけようとするものであるが、俊蔭女の結婚相手は藤原氏である。物語において、俊蔭女の夫である藤原兼雅は、俊蔭女へ深い愛情を寄せながら、あて宮にも求婚する「色好み」の者として語られている。この人物は従来、人物造形上の「矛盾」とされてきたが、論者は多妻婚社会の価値観の観点から再考し、兼雅は俊蔭女と結婚してから一変して俊蔭女だけを寵愛するという設定は、俊蔭女には並び立つ者はおらず、優越な立場にあることを示すものであり、兼雅があて宮に求婚することは、物語の中で誰もが妻にしたいと考えるあて宮でさえも、俊蔭女とせいぜい同等に扱われるに過ぎないということを示すものである、と論じている。俊蔭女と藤原兼雅の結婚の機能は、俊蔭女の、藤原氏の上達部の正妻の地位を保証し、琴の三代目の仲忠が藤原氏の嫡男としての身分を獲得するという身分上昇の道を開くことにあり、仲忠と女一宮の結婚の機能は、琴の四代目のいぬ宮に天皇家、源氏、藤原氏など物語における地上の最高の血統を受け継がせることにある。いぬ宮が父祖から受け継いだ秘琴でもって人々を魅了する、という語り方から、物語に登場するもう一つの家族である正頼家と異なった繁栄のあり方、異なった「后がね」のあり方を描こうとする作者の意図が読み取れる、と論じた。

第五章では、俊蔭一族の官位官職の観点から、俊蔭女の尚侍就任と仲忠の官位昇進の問題が考察されている。まず、俊蔭女の尚侍就任について、奈良時代、平安時代の尚侍制に関する歴史学の成果を踏まえつつ、物語に描かれる俊蔭女の尚侍像の特徴を明らかにした。八世紀、九世紀の尚侍には、高官の妻、実務的で、天皇の後宮ではないという公的な女官のイメージ、夫とともに権力を振るうイメージがあった。村上朝から円融朝にかけての時期は尚侍制の転換期にあたり、物語が成立したとされる円融朝後期になると、尚侍の若年化、形骸化、後宮化の傾向が顕著に見られるようになる。この歴史的変遷を念頭におきながら、論者は、藤原良房の母の尚侍就任と源潔姫の良房への降嫁の史実に注目し、皇女の降嫁と尚侍就任の二要素は、『うつほ物語』における俊蔭女の尚侍就任

と仲忠と女一宮の結婚と見事に対応しており、良房女明子の入内は、いぬ宮の将来の入内を示唆するものである、と論じ、これまであまり議論されていない、尚侍就任・皇女降嫁、子孫から天皇が出るという史実と俊蔭女の尚侍就任の構想の関わりを明らかにした。一方、俊蔭女は終始帝に思慕された女性として描かれている点について、物語の成立当時の尚侍のイメージが投影されている、と指摘した。俊蔭女の尚侍像には、大臣の妻であり、帝の性愛の相手ではないという奈良、平安前期の尚侍のイメージと、実務をせず、名誉的な存在、帝の恋愛対象になりうるという物語の成立当時の尚侍のイメージの両方が見られる、と論者は結論づけている。次に、仲忠の任官について考察した。仲忠は元服時に叙爵され、以降摂関家重臣の貴公子の任官コースを辿っている。女一宮との結婚を実現した後の仲忠は飛躍的な昇進を遂げ、三十歳未満で大納言兼左近衛大将陸奥出羽按察使東宮大夫という高位高官に達している。この飛躍的な昇進の背後には、女一宮の父帝と祖父正頼からの支持があったが、仲忠自身の持つ治世者としての才能と美質がより重要な意味を有するものだと論者は指摘する。仲忠の内大臣辞退は、祖父俊蔭への追贈を実現させようとする孝心による行動としながら、物語内部の貴族社会の政治権力のバランスを熟慮した仲忠の政治判断である、と仲忠の治世者としての側面を読み取った。物語の後半部における仲忠は、うつほ住みの頃の、母親を養う幼い孝子のおもかげが残りながらも、すでに貴族社会の中で周囲の人間関係を円滑に構築できる円満な政治家の風貌を備えた人物として語られる。琴は仲忠が王権へ接近する上で大きく機能しているが、漢才や孝の美德も方法として、この人物の理想性、将来の治世者の造形に寄与している、と論者は結論づけている。

以下、論文に対する評価を述べる。

本論文は、先行研究を踏まえながら、従来別々に論じられた俊蔭一族に関する議論を総合的な観点より再考しようとした、意欲的な論考である。問題意識が明確で、特に異界の琴、異国の漢学、「孝」などの要素を一貫とした視点より考察し、その内的関連性を明らかにすることに成功している。その確かな着眼点、論文構成力、記述力は高く評価されるものである。その一方で、以下の問題点が審査委員から指摘された。

論の整合性に拘りすぎて、かえって明晰さに欠ける部分があり、細部の問題点も掬いきれていないのではないか、物語の虚構と貴族社会の現実の問題の捉え方に関してもより慎重で柔軟な態度が必要ではないか、などの指摘があった。しかしこれらの点について、今後、論者の研究のさらなる進展によって解明され、改善される課題に属するものである。よって、論文審査員全員一致で博士学位論文として十分その水準に達していると判断した。